令和５年度第１１回資料小展示

近代山口の ひな祭り

令和５年２月25日（土）～３月30日（木）

ひな祭りは、3月3日、自分の罪や穢れを人形に託し、流すことで祓おうとする「上巳の祓」と、人形を使ってあそぶ「ひひな遊び」が結びついて現在のかたちになったものです。

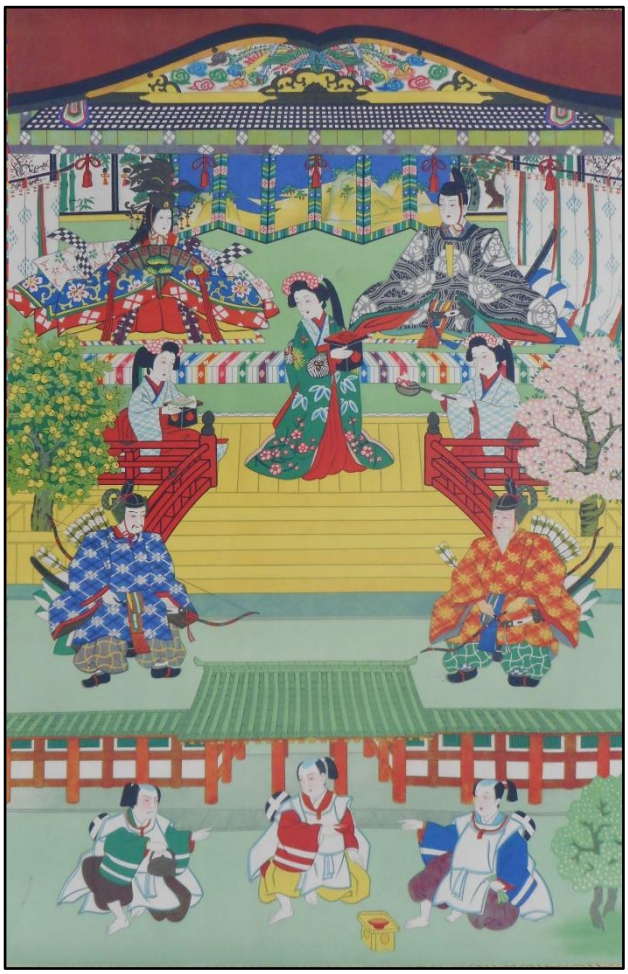
およそ江戸時代の後半になると、3月3日に現在のようなかたちのひな人形を飾るひな祭りが京都や江戸で行なわれるようになり、明治時代以降、さらに広がっていきました。今回は、近代山口におけるひな祭りの様子が窺える資料を紹介します。

１．掛軸のひな飾り

軸物史料267「雛節句絵図」掛軸タイプのひな飾りです（写真次頁）。近代に入ってから製作されたと考えられるもので、絵の部分（本紙）、周りの表装部分とも、紙（洋紙）で構成され、裂の織模様の雰囲気や風帯もすべて印刷で表現されています。

この資料が含まれる、当館の「軸物史料」群は、明治・大正期以降、県立山口図書館が「郷土志料」として収集した後、当館に移管したもののうち、軸物（掛軸など）をまとめたもので、来歴は様々です。この資料も、箱などはすでになく、軸に注記があるわけでもないので、どのような経緯で県立山口図書館に入ったのかはわかりません。

とはいえ、絵の構図などから多少のことはわかります。ここでは、内裏雛（男雛と女雛）は建物の中に座った形で描かれています。これは「御殿雛」といわれ、当時上方（京・大坂）で一般的な飾り方でした。そもそもこのような掛軸タイプのひな飾りは、主に関西地方で行なわれたものでした。この資料も、関西地方でつくられたものだったのかもしれません。



画面上から順に、内裏雛、三人官女、随身（警固の人）、仕丁（下働き）が描かれています。内裏雛は天皇と皇后を模したものですので、内裏雛がいる御殿は天皇のいる場所、内裏（江戸時代であれば京都御所）です。

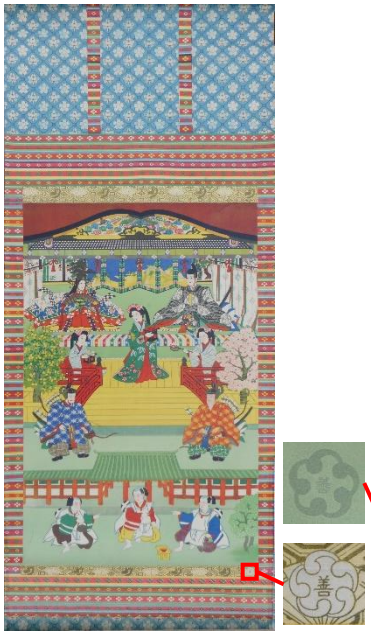
なかでもここで描かれているのは、あらたまった儀式の時などに使う紫宸殿です。紫宸殿とその南に広がる庭（南庭は、重要な儀式が行なわれる場所でした。正面の階の左右に、左近の桜・右近の橘が描かれています。

下の方に見える門は、承明門といって、紫宸殿南庭の正面入口にあたる門です。この門の中と外で、儀式の空間が分けられます。仕丁が門の外にいるのは、下働きなので、天皇たちのいる空間にはいられないからです。

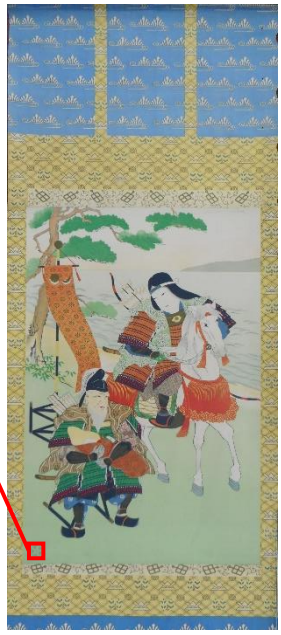
軸物史料のなかには、「雛節句絵図」と対になるとみられる「端午節句絵図」があります。

こちらも、絵、表装とも、紙で構成され、風帯も含めすべて印刷で表現されています。いずれも、寸法が縦74.7cm×横48.8cmと同じで、下部に同じ印が印刷され、発行元が同じであることが窺えます。

これらのことから、近い時期、同じ組織（家）で用意されたものである可能性が考えられます。いずれも紐の損傷が激しいので、よく使われたのでしょう。



「雛節句絵図」
（軸物史料267）



「端午節句絵図」
（軸物史料268）